



Title	スロヴァキアとスロヴァキアの日本学科について
Author(s)	ルカーチョヴァー, エヴァ
Citation	詞林. 2000, 28, p. 44-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スロヴァキアと

スロヴァキアの日本学科について

エヴァ・ルカーチヨヴァー

一

最近までは、スロヴァキアといふ国は世界中でほとんど知られていなかつた。日本でも同様である。それは特に驚くべきことではない。昔からスロヴァキアは大きな国的一部分であり、政治的にもそだつた。だから、独立国としてはまだ若い。スロヴァキアは、古い国だが、歴史的にはいつも他の国に隠れていた。

その昔、この地域は、とてもいい自然環境だったので、早くから人が住みついた。スラブ民族が、カルパチアの谷に来たのは五世紀と六世紀にかけてだつた。八世紀の終わり頃、スロヴァキアの地域に二つの領地があつた。八一二年から八三三年にかけて、それらは統合されて、大モラヴィア帝国として誕生した。八六三年に大モラヴィア帝国の君主は、ビザンチンより聖キュリロスとメソジウスという伝道者を招待した。その一人はスラブ文字を草案し、キリスト教を布教した。

彼らの影響で古代スラブ語は、ラテン語やギリシャ語に匹敵するまでになつた。一〇世紀の初め頃、大モラヴィア帝国は滅び、スロヴァキアは初期の封建制ハンガリーの一部になつた。そのあと何百年間は、スロヴァキアは色々な困難に耐えた。一時的に開放されたのは、第一次世界大戦のあとだつた。一九一八年にチェコスロヴァキア共和国が生まれたが、一九三九年に、スロヴァキアが独立して、スロヴァキア共和国となつた。

だが、一九四四年、第二次世界大戦の終わりごろ、ヨーロッパでは一番目に大きい、ファシズムに対しても反発があつた。一九四五年にチェコスロヴァキアは再建され、社会主義の国になつた。

当時のチェコスロヴァキアの政治経済状態を変えようとする大きな試みは、一九六八年、プラハの春と言われている行動だつた。この動きは、アレクサンデル・ドゥップチエツクという有名なスロヴァキア人のリーダーのもと、全体主義制度を打ち破り、市場経済と民主主義の要素を持ちこもうとした。しかし、一九六八年八月二一日にソ連および同盟国の軍隊が侵攻してきて、この努力は実らなかつた。一九八九年一月一七日に、ピロウド革命と呼ばれている行動があり、新しい民主主義の社会の建設を始めた。この革命により、憲法にのつとり、チェコスロヴァキアを、二つの独立した国、チェコ共和国とスロヴァキア共和国に分立しようとする動きが出

てきた。そして、一九九三年一月一日に、新しいスロヴァキア共和国が誕生した。

スロヴァキア共和国は、中央ヨーロッパの中心に当たる。近隣国は、西はチェコで、南西はオーストリア、南東はハンガリー、東

はウクライナ、北はポーランドである。スロヴァキアの広さは四九・〇三九平方キロメートルで、国土はほとんど山で、八〇%ぐらいは海拔七五〇メートルの山岳地帯である。北と中央スロヴァキアは丘陵地帯である。一番高い山は、ハイタトラス山脈のゲルラハ山で、海拔二六五五メートルある。南北スロヴァキアの丘陵地帯を下ると、大事な農業地帯であるドナウ川の平野と東スロヴァキア平野に繋がる。ドナウ川はオーストリア、ハンガリーとスロヴァキアの三つの国を流れ、最も重要な川である。スロヴァキアは、温和な気候で、四季がある。

スロヴァキアには温泉、スキーリゾートとミネラル・ウォーターの源泉が沢山ある。そのため、観光条件は整っている。スロヴァキアには、信じられないくらいの美しい自然があり、神秘的な山脈、きれいな湖、滝と広い高原がたくさんある。

スロヴァキアの人口は約五三五万人で、それはヨーロッパで二〇番目の人口である。そのうち、八五・七%はスロヴァキア人で、残りは、他民族の、ハンガリー人、チエコ人、ジブシーなどである。六〇・四%はローマンカトリック

教で、あとはプロテスタントと東スロヴァキアでギリシャ正教とロシア正教などである。全部で、一五の宗教がある。スロヴァキアは八つの行政地域があり、首都は布拉チスラヴァで、約四五万の人口がある。

スロヴァキアは、有形・無形の価値のあるものがたくさんある。そして、豊富な歴史的文化財がある。その中には、古い歴史の証人である魅力的でユニークな建物がある。私たちの地域には、いろいろなスタイルと状態の歴史的建造物がある。ロマネスク様式の円形建築物、聖礼のゴシック様式建築物、ルネツサンスとバロック様式の莊園、そして各時代が産んだいろいろな建築様式の町の大きな部分がそのまま残されている。視覚芸術においては、歴史的と現代的な最高傑作がある。スロヴァキアの絵画の歴史は、ロマネスク以前から始まっている。スロヴァキアの歴史では、文学も重要な位置を占めていた。九世紀に古代スラブ語が標準語として使われてから、スロヴァキアの文学が始まった。

二

スロヴァキアは独立した国として、とても若い。そのため、スロヴァキアの日本学科も、科学的な分野として、歴史は短い。社会主義の時、日本語を勉強したがっていた人は、チエコのプラハにあるカレル大学で勉強する機会しかなかつた。

チエコの日本学科は、五〇年以上の長い歴史がある。レベルは非常に高くて、全ヨーロッパでも有名である。カレル大学で日本語、日本史、日本文学、日本言語学、日本語辞学などを卒業した学者は、ヨーロッパのどんな大学の日本学科を卒業した人にもひけをとらない。他のヨーロッパの国からも、カレル大学で日本学を勉強する希望がある研究者がチエコに来ている。その五〇年間の間には、カレル大学で日本語を勉強した人数は多い。特に優れた学生は、すばらしい日本学者になつていて。博士を取つて、プラハの科学アカデミーで研究を続けることができるし、プラハのいろんな大学で日本語を教えたり、他のチエコの町で日本学科を設立したり、外国の有名な日本学科で自分の研究を広げたりしている。

一番理想的なチャンスは、もちろん、卒業してから日本で日本学の研究することである。だから、大勢の日本学者は日本で勉強する機会を探している。日本語はヨーロッパの言葉からとても離れている言語なので、自分の国でいくら勉強しても、なかなか完璧になる方法がない。日本語を勉強している人は、たとえ日本で日本学の研究を続けることができたとしても、何年間かは日本語の知識に磨きをかけることが必要である。ヨーロッパでは、すばらしい日本語を話せるヨーロッパ人が、非常に評価されている。また、日本や日本語についての適当な知識があれば、本国でも、他のヨーロッパの国でも、いろんな仕事が手に入るチャンスがでてくる。

たとえば、大学で教えるポジションに興味がなくても、博物館、文化庁、外務省などの日本分科で働くことができる。通訳の仕事もとても大切である。最近は、全世界の国は、お互いに近づく努力をして、だんだん地球村になつてきている。通信の発達で一体化した世界は、バベルの塔みたいな言葉の渾沌を整理することはこれからもっと重要な問題になつてくる。一般の人があな言葉を勉強するということは無理なことなので、通訳者の仕事は議論の余地もないほど重要である。特にヨーロッパ人にとって、エキゾチックな言葉の知識はめずらしいことだと言われている。だから、日本語の研究は、ヨーロッパで最近人気が増している。

他の分野は、文学の翻訳である。文学は民族の文化と芸術の大切な部分だが、詩か小説を原書で読むことができる人は少ない。翻訳者の責任は、原書のもとで、ある意味で新しい、原書の大切なポイントを守つていて、なおかつ、いい形で原書の芸術的な美をも表している作品を作ることである。世界の文学にとつて、翻訳者の存在は必要不可欠となる。

日本語の難しさは、数え切れない表現の華美だけではなく、特に重要な問題は漢字である。ヨーロッパ人が「普通」と感じる言葉と比べると、日本語の勉強はとても難しいチャレンジとなつてくる。そのため、日本語を勉強しようとしている大学生のなかには、途中でやめる人の数は、もっと簡単

な言語を勉強している人と比べて多い。

プラハのカレル大学における日本学科の成果は、五〇年間の歴史でかなりのものになった。大学の図書館は専門的な本が溢れていて、いろんな日本学科の分野についての書類が見つけられる。科学アカデミーでもすばらしい日本についての研究材料がある。チエコには、優秀で有名な日本学者、通訳者、翻訳者、日本史学者など何人もいるので、チエコの日本学科は進んでいると言える。多くの日本文学がチエコ語に翻訳されている。例えば、川端康成、安部公房、三島由紀夫、武田泰淳、谷崎潤一郎、芥川龍之介、大江健三郎、夏目漱石、松尾芭蕉などの作品である。「源氏物語」さえもうチエコ語になつていて。

三

スロヴァキアの日本学科は、チエコの日本学科のように、社会主義の時に設立された。でも、そのときには、チエコスロヴァキアは一つの国だったので、日本語を勉強したがつていたスロヴァキア人はプラハ、ポーランドのワルシャウ、ロシアのモスクワなどに勉強しに行くしかなかつた。プラチスラヴァーの一番有名な大学はコメニウス大学である。コメニウス大学で初めての日本語のコースが設けられたのは一九八六年だつた。その年には、日本語を勉強したかつたスロヴァキ

ア人の数は、三〇〇人だつたが、九人しか選ばれなかつた。その九人のなかから、勉強の途中で四人が試験に落ちて、勉強をやめた。卒業したのは、五人だつた。私たちのコースは、日本語だけではなく、英語・日本語、通訳・翻訳という専門コースだつた。卒業した五人のなかで、四人だけが日本語の研究を続けている。

去年、コメニウス大学で新しい日本学のコースで勉強した大学生が卒業した。プラチスラヴァーの大学の歴史で、それは、二番目の日本語のコースだつた。スロヴァキアは、科学アカデミーもある。このアカデミーの東洋学科では、日本語を卒業した研究者は、博士をとることができる。スロヴァキアの日本学科はとても若いので、チエコのレヴェルと比べられるまでは、新しいエネルギーとたくさんの時間が必要だと思われる。若いスロヴァキアの日本学者は、日本で勉強する機会があれば、一生懸命努力し、なるべくたくさんの自分のエネルギーを選ばれた分野の研究に投資すれば、スロヴァキアの日本学科もヨーロッパの水準に達すると信じている。

日本文学で、スロヴァキア語に翻訳されている作品は、あまりない。最初にViktor KRUPAといふ日本学者は、川端康成の「眠れる美女」、「雪国」(Spiace krasavice, Snezna krajina, published in 1970.)などを翻訳し、一人町のKarol KUTKAといふ日本学者は、三島由紀夫の「潮験」と「愛の乾き」を翻訳した(Priboj, Smad po lasko, published in 1980.)。

しかも、スロヴァキア人で日本文学を研究するため、日本の大学に留学したのはこれまで三人しかいない。一人田が一九九一年から、一年半大阪大学に留学したIvan RUMANEKである。彼は、古典を学び、昨年一九九九年六月に記念文に題する「KINO CURAJUKI, japonsky uvod k učebnici japonskej poezie」へよう論文を発表した (REVUE SVETOVEJ LITERATURY 2/99, Slovensky spolok prekladateľov uměleckej literatúry)。在学中は、「源氏物語」も勉強していた。

一人田が Maria MELICHEROVA である。彼女は一九九五年から一九九七年まで北海道大学や三浦綾子の小説の研究をしてきた。特に、日本の文学の中でキリスト教がどのように取扱われてゐるかに興味がある、三浦綾子をひとりあげ、やしら、その短編を翻訳した (Ajako Miura: A slubujem, že ta nikdy neopustím, REVUE SVETOVEJ LITERATURY 2/99, Slovensky spolok prekladateľov uměleckej literatúry)。

二人田が私である。一九九二年から一九九五年まで北海道大学で、主に近代文学を勉強した。北海道大学に行く前に、安部公房の「無関係な死・時の崖」という短編集が、「夢の兵士」を翻訳した (Kobo Abe, Snovy vojak, Literarny tyzdeník, 4/93)。帰国後、スロヴァキア科学アカデミーの東洋学科で近代文学と、日本神道についての研究をすすめた。その際、吉本ばななの「キッチン」の一部と俵万智の「ゆべ一つの恋」、「サハタ記念曲」を翻訳し (Banana Josimoto: Kuchyna, Maci

Tawara: Kvapky casu, Literarny tyzdeník, 6/97)、また、「チモヒーネー神話」の二つのかの論文も翻訳した (Maci Tawara: Cokoladova revolucia, REVUE SVETOVEJ LITERATURY 2/98, Slovensky spolok prekladateľov uměleckej literatúry)。その後一九九八年から、大阪大学の国文学研究室に所属し、近代文学の研究を続けていた。特に、安部公房の小説に焦点をあて研究している。博士論文も彼の作品について書く予定である。私は第二次世界大戦後に書かれた日本の作品に興味があり、新田次郎の「だいごの歌」へよう短編を翻訳した (Dzito Nitra: Zverajove basne, REVUE SVETOVEJ LITERATURY, Slovensky spolok prekladateľov uměleckej literatúry 2/99)。今後、安部公房の「砂の女」やベロカ・キト船に翻訳したところをやってくる。

(Eva Lukáčová 本学大学院博士後期課程)